

社会の変化に主体的に生きる力が育つ社会科学習

—— 子どもが主体的にかかわり、
考える力や表現する力を育てる学習活動の工夫 ——

柳原小学校 松本 静枝 東 小学校 柏瀬 順一
名草小学校 石原 玲子 富田小学校 島田あけみ
小俣小学校 久保 恵子 相生小学校 山岸伸太郎
南 小学校 金井 雅博

1 はじめに

本稿は平成九年度栃木県小学校社会科教育研究大会足利大会で提案発表したものをもとにした報告である。

2 基本的考え方

(1) 栃小社研の取り組みをうけて

栃小社研はこれまでの研究の歩みをさらに発展させ、『社会の変化に主体的に生きる力が育つ社会科学習』を設定した。そこでは「主体的に生きる力」を「学習の主体者である子どもたちが、学習の対象である社会的事象に主体的にかかわりながら学習活動に取り組むことを通して、ものの見方・考え方を深めたり、それらを表現しながら、自ら意欲的に学ぶ態度や考える力、表現する力などが育つようにしていくことである。」と定義している。この研究においては、副題に「子どもが主体的にかかわり、考える力や表現する力を育てる学習活動の工夫」を設定し、栃小社研の課題をふまえ21世紀に生きる子どもたちに社会の変化に主体的に生きる力を育てる社会科教育のあり方を追究したいと考えた。

(2) これまでの授業の反省から

これまでの社会科の多くの実践においては、思考力・判断力を学習の能力・技能（スキル）としてのみとらえる傾向が強く、子どもたちに考えたり判断したりする技能や方法を身につけさせることによって、考え判断できる子どもを育てることができるととらえ問題解決学習に取り組んできたように思う。しかし、そこには多くの問題点が残されていた。

- ・調査活動が事実の羅列に終始し自分なりの考え方を持つまでに至らない。
- ・話し合い活動において事実を踏まえた考えを高め合う場面が持てない。
- ・指導支援のポイントが不明瞭で、活動が子どもまかせになる傾向があった。
- ・まとめが知識の整理にとどまり、見直しや考え直しが機能しない傾向がある。

子どもたちは、将来の学習や生活の場において、様々な課題や問題場面に出合い、それらを自分なりに解決しながら生きていかなければならない。そのようなときに、解決方法を尋ねながらその場を取り繕ったり、いつも他人の言いなりになって処理していることなく、真に主体的に生きていくことのできる力の素地を育てるためには、まだまだ解決すべき課題が多い。

(3) 「主体的に生きる力」をどのようにとらえたか

遭遇した様々な問題場面において自分なりに解決する必要に迫られたときに必要とされる力、すなわち生きて働く力が「主体的に生きる力」であると考えた。学習や生活の中で、問題の解決場面などに出合ったと

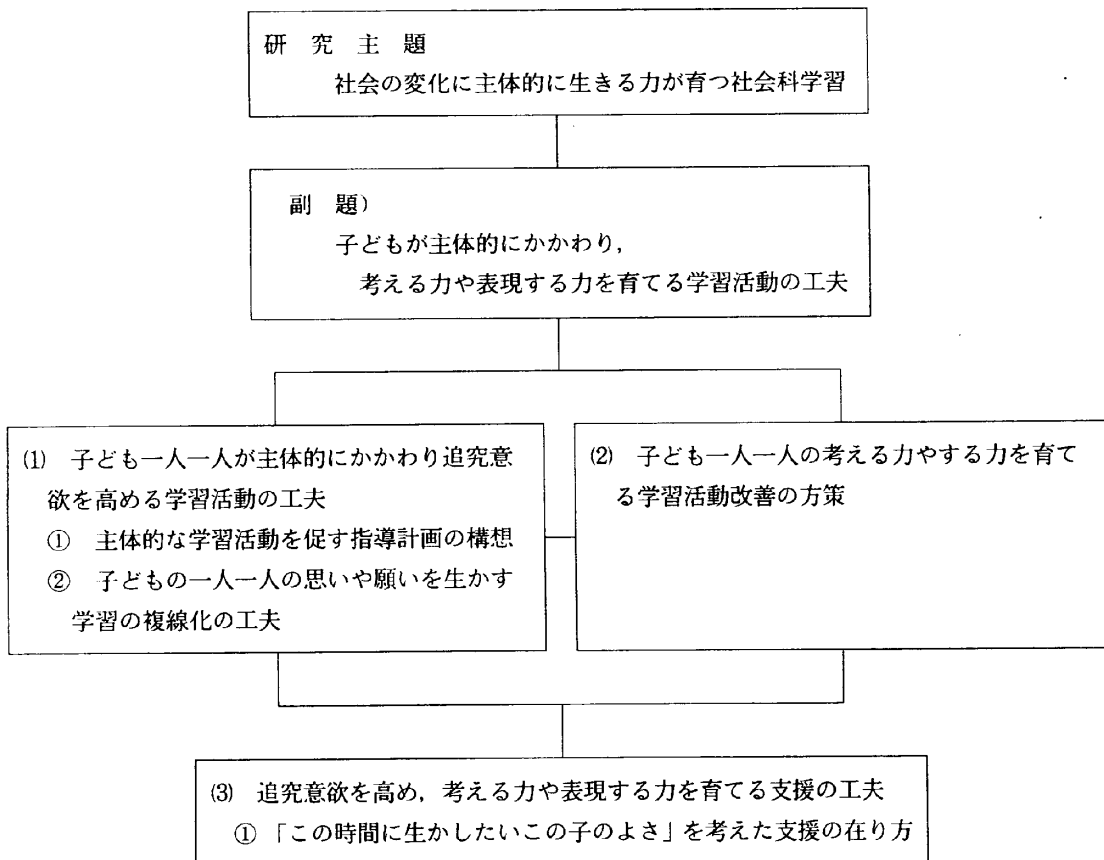
き、必要な見方や考え方を引き出し、自分なりの考えの判断や問題の解決ができるようにすることが重要である。このことは、「主体的に生きる力」を社会科の授業レベルで必要とされる学習のための能力・技能としてのみとらえるだけでなく、自らの生き方とのかかわりのなかで子ども一人一人が獲得していくものであることを意味する。

「主体的に生きる力」をに子どもの内面と深くかかわるものであると考えた時、その育成には、教育の本質に根差した教師の支援が不可欠になるであろう。つまり、「学習してよかった」「学習のやりがいがあった」「学習の中で輝くことができた」という自分自身への手応え、実感に至る学習経験の積み重ねの中でこそ育つものである。

(4) 子どもが主体的にかかわり、考える力や表現する力を育てる学習活動の工夫

「子どもたち一人一人が、具体化した学習問題の解決に向けて、自分の思いや願いなどを生かして社会的事象に関心や興味を持って進んでかかわり、自分の持てるよさを最大限に生かして解決や実現を目指していく過程において、考える力や表現する力を育てる学習活動をいかに工夫していくかが研究の中心となる。」(栃小社研・研修部 H9.6.19)という問題提起をふまえ、これまでの社会科学習への取り組みを見直し、子どもが主体的にかかわり社会の変化に主体的に生きる力が育つ社会科学習の進むべき方向を追求したいと考え副題を設定した。

3 研究の構想



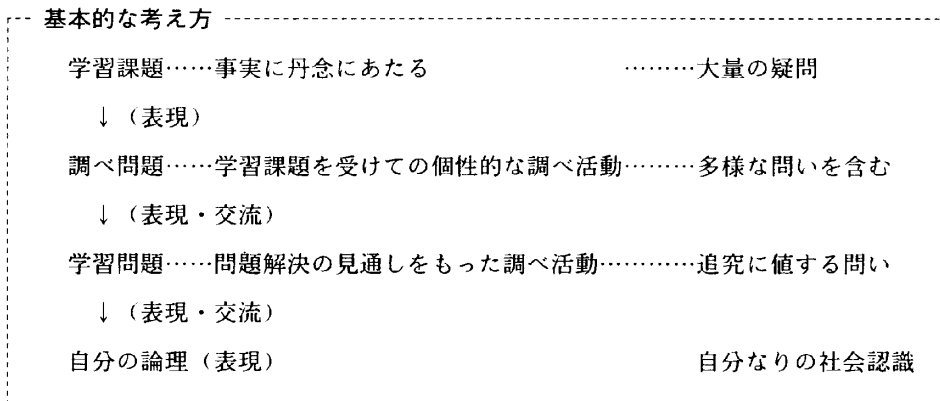
4 研究の内容

(1) 子ども一人一人が主体的にかかわり追究意欲を高める学習活動の工夫

① 子ども一人一人の実態を把握し思いや願いを生かした主体的な学習活動を促す指導計画

研究主題の中核をなす思考力・表現力の育成は、学習過程にそって育てられるものであり、どのような学習過程を展開するかが重要になる。表現しつつ思考力を育て、思考しつつ表現力をのばしていく学習過程を構築する必要がある。同時に、それは子ども一人一人の思いや願いを生かした主体的な学習活動を促すことが可能なものでなくてはならない。

そこで、指導計画の作成にあたっては子ども一人一人の問いの深まりの過程をふまえ、調べと表現が重層的に繰り返される過程のなかに、子ども相互の思考の交流を位置付け、子ども一人一人の思いや願い、自分とのかかわりを問い直すことで、追究の意欲を持続し高めながら社会的事象の意味をつかんでいくような学習過程を構築したいと考え、それを下のような基本的な考え方としてまとめてみた。



学習課題は学習への入り口として、学習への関心を高めるため教師が提示した大量の疑問を生むような課題に取り組み、表現する活動を設定である。そのままでは子ども達の意識の上を流れ去ってしまう社会的事象に楔を打ち込み、立ち止まらせ、思いや願いを生み出す契機となる段階である。

生まれた疑問について調べて表現するのが、調べ問題である。ここでは、自分なりの社会認識に至るような段階ではなく、社会的事象の構造を理解する段階と考えている。

学習問題では問題解決の見通しをもった調べ活動と表現を仲間と交流する中で自分の論理を形作っていくわけであり、自分の論理や自分なりの社会認識を確かなものにする段階と言える。

この構想で特に重視しているのは、調べ(表現)活動の間に、思考や表現の交流場面を大切にすることである。仲間との交流が、次の活動へのバネになるような支援が重要になると考える。

展開例 (6年: 条約改正と韓国合併)

【学 習 活 動】

【思 考 の な が れ】

- | | |
|-----------------------------------|---|
| ア. ノルマントン号事件のポスターを 作成する。(学習課題) | : 当時の人々の気持ちの推測。 ↓ 共感をふかめ条約改正の追求意欲の喚起。 |
| イ. 条約改正の決め手を調べ話合 (調べ問題) | : 改正への努力の比較検討の話し合い。 ↓ 当時の力の強い国が弱い国を犠牲にして豊かになるのは 当然という考え方の気づき。 |

- ウ. 当時と現代の庶民生活の比較。 : 日本は豊かになったのだろうか? というゆきぶり。
 (交流活動) ↓ 新しい問題への切実感の喚起。
- エ. 改正後の日本は○○な国だ! : 帝国主義と民主主義がせめぎあいながら戦争へ進んでいった
 (学習問題) ことへの気づきを期待したい。
- オ. ポスターセッション : 表現活動は、資料の転記の発表ではなく、自分の考えや感じ
 (表現・交流活動) たことを伝える形をとることで相手を意識した発表のまでの
 プロセスを身につけさせたい。
- カ. ノート作り : 学習を通してつかんだ自分なりの考えの表現。

※ ポスターセッションについて

いままでの調べ活動の発表は、順番にグループで発表し、他は聞き役にまわるのが主流であったが、ポスターセッションはこれを一新するものである。複数の発表を同時に行い、聞く側は自分の聞きたい発表を自己決定し選んで聞く形態をとる。次のような利点がある。

- ① 子ども一人一人の役割が明確にできる。
- ② 繰り返し発表できる。
- ③ 聞き手が少人数なので安心して発表できる。
- ④ 聞きたい発表を自分の意志で選択できる。

② 子ども一人一人の思いや願いを生かす学習の複線化の工夫

学習活動の複線化は、多様な子どもの思いや願い・問題意識や個性を生かすことを基本に据えて、社会科の問題解決能力を育てていくための一つの方法である。従来の画一的な授業から、めあて・教材・資料・調べ方・表現活動の方法・学習環境などについて複数のものから子ども自身が選択して学習を進める選択的学習に転換することにより、子どもたちの個性的な学習活動を保障するものととらえた。

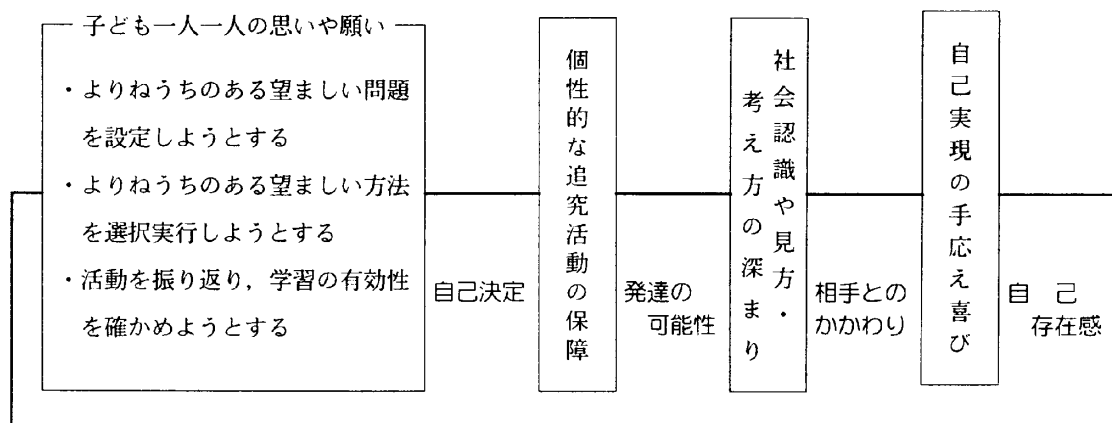
「複線化の授業」を展開するにあたっては、子ども達が自分にとって必要なものを自己決定できることが必要条件になる。同時に、教師は子ども達一人一人の自己決定(すなわち「思いや願い」)を把握し、必要なことを必要なだけ支援し、一人一人の「思い」を遂げさせるための努力が必要となる。そこでは、児童一人一人の思いや願いを教師が把握するための努力が不可欠になる。そこで、一人一人の「思い」を次の三つの視点から捉え、一覧表に整理することで、より充実した授業の展開が可能ではないかと考えた。

--- 子どもの思いや願いをとらえるための三つの視点 ---

- ・この子は、どのようなよりねうちのある望ましい問題を設定しようとしているのか
- ・この子は、どのようなよりねうちのある望ましい方法を選択実行しようとしているのか
- ・この子は、どのように活動を振り返り、学習の有効性を確かめようとしているのか

ここまでの学習活動の複線化の構想をまとめると図のようになる。

子ども一人一人の思いや願いを生かす学習の複線化の構想



※ 丸ゴシック文字は教師の支援の基本的立場であり、それぞれが可能な場の構築に努めることとする。

◆学習の複線化における集団での思考の重要性◆

学習活動の複線化への取り組みにあたって意外に軽視されがちなのは、個別の追究（調べ活動）のあとの集団での思考を深める活動である。調べ活動の結果を集団の中で検証する場面の指導の在り方を学習問題の設定の段階で構想しておくことが重要である。

集団での思考を深める場面の構想にあたっては、当然のことながら学習問題の質によってとるべき方法が異なると考えられる。

A 学習問題が単元の基礎的・基本的理解を追究する場合

→学級全員が発表し、発表を聞いたうえで確実な理解に至る話し合い活動や教師の補説が準備されている必要がある。そのための思考活動を活性化するためには、相互の発表の共通点と相違点を意識できるよう具体的な観点を準備しておく必要がある。また、学習問題設定の段階で、クラスへの提案を意識した表現方法を示唆しておくことも効果的である。

B クラス全員が単元の基礎的・基本的事項を押さえた上でそれぞれの考えを深める場合

→共通の理解を求めるのではないので自分の考えや思いを他へ伝えることを意識させた追究が授業を活性化させると考えられる。したがって発表する際も、発表を聞く際も個々の意志決定の過程を重視した支援が重要である。また、発表方法などもバラエティーにとんだものが可能な態勢を用意しておきたい。

(2) 子ども一人一人の考える力や表現する力を育てる学習活動の工夫

① 思考力・表現力を育てる学習指導改善の方策

社会科の学習において教師が知識や技能を一方向的に教え込む学習においては、思考力・表現力を育てることは困難である。子どもが主体となった学習活動の中でこそ育つものである。そのために、思考力・判断力（そして、その表裏をなす表現力）を育てる立場から社会科学習の改善の方策を足利支部の部員が持ち寄り以下の表にまとめてみた。まだまだ、至らぬ点が多いが、今後更に内容の充実を図っていきたい。

| | 指 導 の ポ イ ン ト | 支 援 の 方 向 性 |
|---|---|---|
| 問 題 づ く り | <p>■「調べたいことは何ですか？(どんなことですか?)」という発問の問題点は子どもからたくさん出させて問題を広げて絞っていくことである。子どもからの問題の分類が非常に困難になり表面的、文字面あわせになる傾向が多い。子どもを尊重しているよう結果的に意欲をなくすことになることが多い。</p> <p>■学級としての問題は、内容的に一つにしぼる。学習問題の表現は全員同じである必要はない。文字面を整えることより問題の方向性をしぼることが大切である。</p> <p>■学習問題は小単元のねらいを、一人一人の子どもが達成するためのものである。問題は教師が与えるとか、子どもが言うとかいう形式の問題ではない。大切なのは問題意識(問題への切実感)がもてるかどうかである。</p> <p>★設定の方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・矛盾した二つの事象のズレから ・事実を提示するするまゝに子どもの考えを出させる。(ひっくり返してやる！) ・身近な事例と結びつけて(数量) ・体験的な活動から(体験のための体験、理解させるための体験にならないように留意する。したがって失敗も重要になる。体験が思考を活性化したり思考や意欲を生み出すようなものにした。) <ul style="list-style-type: none"> ・感情移入 ・意表を突く具体物の提示 | <p>□「どうして」「なぜ」「おかしいな？」等、教師や仲間の問いかけや、投げかけが自然に受け入れられる土壌を作っておくことがたいせつである。 (B:相手とのかかわり)</p> <p>□ここで一人一人の子どもがどのような理解や思考の仕方や学習への取り組みをするのかなどの観点から子ども理解が重要になる。これを子どものよさや可能性と考えてよいと思う。</p> |
| 予 想 | <p>■予想は広げたままでよい。一人一人の予想の根拠を明確に。</p> <p>★根拠を・学習経験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料 ・生活経験 ・ヒント教材に求める。 | <p>□根拠のあてずっぽうは許さないこと。根拠を持つ=思考=自己決定ということをお忘れはならない。(A:自己決定)</p> <p>□自分なりの根拠を可能な限り尊重する。切り捨てない。(C:自己存在感)</p> |
| 学 習 計 画 | <p>■調べる計画では「どんなことを」「どんな方法で」調べるか(確かめるか)までを具体化する。</p> <p>■ほしい資料を請求させるまでになれば一流です。</p> | <p>□個々に具体化させるための援助が必要。 (A:自己決定)</p> <p>□大変なことなんだけど、可能な限り応えたい。教師側の教材把握と子ども理解が深ければ、それほど困難でない場合が多い。 (D:発達の可能性)</p> |
| 調 べ 表 現 す る 学 習 | <p>■調べる学習では、できるだけ個別に(またはグループで)学習させる</p> <p>■教師は可能な限り個別的な指導に徹する。</p> <p>★資料から「わかったこと」は事実であり「考えたこと」は思考である。たくさんのお事実を見つけ出し、それを自分なりの観点で整理できるようにすることが重要なのだ。しかし、何をどう考えたらよいか知らない子が多いのも事実である。考え方の指導も大切である</p> <p>A 事象について理由や原因を探る B 事象について共通の性質を探る C 事象について全体的な姿を探る D 問題を解決する方法を探る</p> <p>■調べる過程で表現活動を位置付けたい。</p> <p>★表現活動ではこどもの選択と自己決定の場を広げよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・複線型学習の導入 ・選択と自己決定の場は学習内容以外にも(用紙の大きさや期限の設定など学習の進め方にも) <p>★表現活動をくりかえし位置付けることが効果的である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・表現活動は修正しくりかえされることが大切である ・表現活動は修正の跡が残っていることが大切である ・表現活動は調べ活動(特に観察)と連続させる | <p>資料の選択は子どもに任せる (A:自己決定)</p> <p>□教師は「考えなさい」と言うことは多いのだが、考え方や考える方法については意外にも日常充分な指導をしていないことが多いだろう。 (D:発達の可能性)</p> <p>□考え方を鍛える 低中学年では a 一定の視点から比較する b 矛盾に気づき理由を説明する 高学年では a 何が置き換えることが可能か b 何が結び付けることが可能か c 変えるためにはどうするか (何を加えるか・除くか・並べ変えるか) d どうすれば他で用いられるか</p> |
| 考 え を 交 流 す る 学 習 | <p>■つなぎ言葉で子どもの思考を支援する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「どうして、そう思ったの」抽象的思考→具体的思考(演繹的思考を促す) ・「まとめていうと、どういうことが言えるのかな」具体的事実に意味づけ(帰納法的思考を促す) <p>■対話を通して子どもたちとかがわることが重要である。</p> <p>子どもの表現を意味づける … (C:自己存在感)</p> <p>↓</p> <p>子どもが互いに共有できる課題を見つけ出す … (B:相手とのかかわり)</p> <p>↓</p> <p>互いの考えやよさをわかり合う過程を設定する … (B:相手とのかかわり)</p> <p>↓</p> <p>より高次の興味・理解へと誘う … (D:発達の可能性)</p> | <p>□子どもの個性的な発想を生かす支援が重要である。 (C:自己存在感)</p> <p>□グループや学級の意見ではなく自分の考えを述べるように援助する。 (A:自己決定)</p> <p>□没集団ではなく集団を活用するかわり方を育てる。(B:相手とのかかわり)</p> |
| ま と め の 学 習 | <p>■学習問題や予想にふりかえってまとめさせる。</p> <p>■調べたことから、社会的意味や歴史的イメージを考えさせる。調べたことの発表や事実のまとめだけでは三流であることを忘れない。</p> <p>■自分の考えをイラストや構造図などで表現させるようになると一流</p> <p>■調べ方(学習の方法)をふりかえさせることも忘れずに。</p> <p>■問題を残し次の小単元(自由研究)に発展させる。</p> | <p>□自らの思考の変容を意識させる。</p> <p>□自分の生活とかかわりという(公民的資質)レベル。</p> |

(3) 追究意欲を高め、考える力や表現する力を育てる支援の工夫

① 生徒指導の機能が生きる授業

「新しい学力・生きる力の育成」という今後の学習指導がめざすべき方向を考えた時、学習への子どもたちの参加を支える基盤として、子どもたちの内面に「自分から、進んで、集中して、最後まで学習し、協力し、参加しようとする」意志や能力が育っていることが必要であると考えた。同時に、このような意志や能力は、社会科の学習の問題解決のプロセスを身につけていく過程で、自分自身への手応えとして一層強化されていくと考えている。「支援」とは、このように「子どもの内面のありよう」にまで関わる「指導」であると考えられている。

そこで、今回の研究においては相生小学校の「生徒指導の機能が生きる学習指導」の研究成果を取り入れ、以下の四つの生徒指導の機能による学習指導の補正作用を重視した。

生徒指導の機能

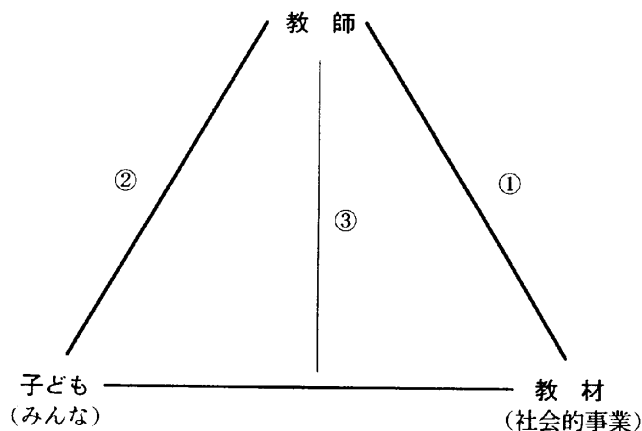
- ・自己決定の力を育てるよう支援する
- ・相手とのかかわりで行動するように支援する
- ・個が存在感を持つように支援する
- ・子どもがその発達の可能性を最大限発揮しうるような場や機会を持てるよう支援する

② 思考力・表現力を育てる支援の構想

「この時間に生かしたいこの子のよさ」を考えた支援の在り方

「一人一人のよさを生かす授業」「思いや願い（個性）を大切に授業」は、「みんな」を対象とした授業から「この子」に視点をおいた授業づくりへの転換が不可欠である。また「子どもが主体的にかかわり、考える力や表現する力を育てる」という立場からも授業における支援の在り方を「みんなをどう支援するか」という従来の授業づくりの発想では対処できないことはいうまでもない。私たちのこれまでの指導計画の作成は、ほとんど、学習内容の研究と、それをみんなに分からせるための一般的な指導の手順を考えて終わっていた場合が多かったように

思う。教師と子どもと教材の関係を図のように表すと、①の方向の研究にその主力が注がれていたように思われる。もちろん②の方向の研究にも努めなかったわけではないが、実体のない「みんな」をおいかけ、どうしても抽象的なものになってしまうがちであった。そのため、今、求められている③の方向の研究、すなわち子どもが教材（社会的事象）にどの様にかかわるのかという最も大切な部分への切り込みが甘くなっていた。



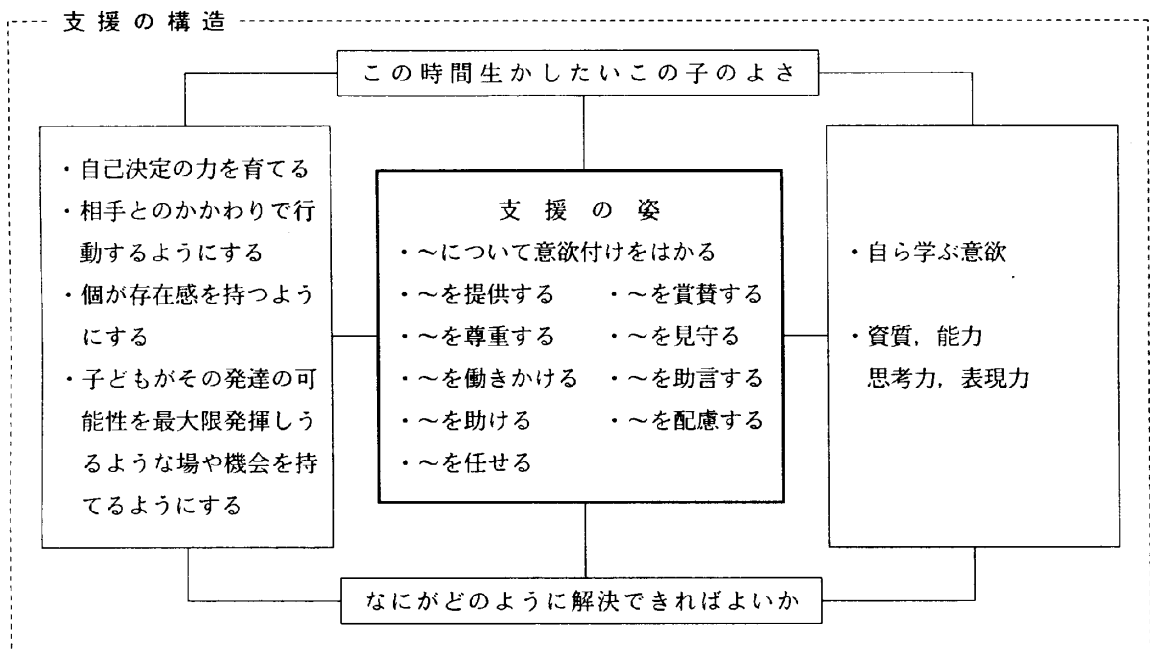
しかし「この子」に応じた授業づくりを進めるにあたっては、大きな問題がある。つまり、学級に40人の子どもがいるとすると40人の一人一人に視点をおいた授業をつくることは、実際問題として不可能である

ということである。教師が超人的な力量でも持たない限り、毎日の一斉授業の中で40人一人一人に即した授業など、とてもできるものではない。

この問題を解決するにあたって、40人は不可能でも、「ひとり」に視点をおいた授業づくりなら可能なのではないか、「ひとりのよさ」を生かす支援の在り方なら不可能ではないと考えた。

「この子」に視点をおいた授業は、一見、一人だけを尊重し他の子を無視した不公平な扱いのように思われる可能性があるが、決してそのようなことはない。「この子」に視点をおき学習展開を工夫することによって他の子どもたちを積極的に学習に取り組みさせることもできるであろうし、また、他の子どもたちも「この子」の学習に係わることで、学習をより確実にすることができるのである。なぜなら、「この子」に視点をおくことによって、発問・助言が子どもの思考や心情に即したものになるし、学習に係わらせることで、「この子」と自分との考え方や学習の方法の違いを、はっきり自覚できることが可能になるからである。

視点をおく子を選ぶにあたっては、単元の目標や、内容、クラスの実態等により異なるが、単元の内容や活動に興味や知識・体験を持っている子が望ましいと考えられる。ただ、大事なことは授業のイメージがはっきり浮かぶ子（発問・助言や活動が計画だてられる子）を選ぶことであり、恣意的な選び方や機械的な選び方は望ましくない。授業の成否に係わる重要な問題であり、単元全体の見通しと十分な児童理解上に立って慎重に選ぶことが大切である。



5 今後の課題

なにぶん力不足の研究であり残された課題は多い。特に、評価についての研究は①思考力の評価のありかた。②複線型授業における評価のありかたを中心に次年度研究グループの最大の課題であると考えている。また、思考力・表現力の育成につながる実践的（すぐ授業で活用できる）アイデアの収集と検証も部会としての大きな課題と考えている。

評

社会科においては、国際社会に主体的に生きることができる国家・社会の形成者として必要な公民的な資質の基礎を養うことを一層重視し、子供の主体的な活動を通して、これからの変化の激しい社会に自らが考え判断し、主体的に生きていくことができる力の育成を図ることが重要です。そのためには、自ら意欲的に学ぶ態度や考える力、表現する力などの育成を一層図り、社会科の教育を進めることが必要であると考えます。

本研究は、このような課題を受けて、栃木県小学校社会科研究会でのこれまでの研究の成果を踏まえ、これからの社会科の授業の在り方を実践的に研究されました。

研究の特色をまとめてみますと、

(1) 子供一人一人が主体的にかかわり追究意欲を高める学習活動の工夫

- ・表現しつつ思考力を育て、思考しつつ表現力を伸ばしていく学習過程の構築に努められた。特に、ポスターセッションという表現・交流活動は興味深いものがある。
- ・子供一人一人の思いや願いを生かす学習の複線化の工夫に努め、子供たちの個性的な学習活動を保障しようと試みられた。

(2) 子供一人一人の考える力や表現する力を育てる学習活動の工夫

- ・思考力、表現力を育てるために、単元レベルでの学習の流れにそって指導のポイントや支援の方向性を明確にし、改善の方策をまとめられた。

(3) 追究意欲を高め、考える力や表現する力を育てる支援の工夫

- ・教師、子供、教材という3つの関係をもう一度確認し、「この時間に生かしたいこの子のよさ」を考え、「この子」に視点をのいた支援の在り方について研究された。

このような本研究は、新しい学力観に立つ社会科授業の展開を構想していく上で大いに参考になるものと考えます。

今後、評価についての研究が課題とされておられるようですが、先般、文部省から発表されました「教育課程実施状況調査」の実施結果に見られますように、社会科においては、知識・理解よりも思考力や表現力が相対的に劣るという実態からも、評価の研究と併せてこの研究を継続され、更に研究を深められますことを期待いたします。